帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

城郭研究と考古学のあいだ

福　島　克　彦

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．問題の所在
Ⅲ．地表面観察と発掘調査
Ⅳ．縄張り図の評価と方法
Ⅴ．軍事面と非軍事面について
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

あくまでも相対的な意味でしかないが、さまざまなジャンルの中世遺跡のなかで、城郭（城館）遺構は、もっとも確認でき、認知されやすい遺跡対象である。こうした性格は江戸時代まで溯り、各地の地誌には城跡の伝承が記され、現在でも基礎資料となっていることからもわかる。また、近代以降も郷土史の叙述などにも取り上げられた。その目的や動機には多くの問題を内包していたが、一方で近代の地域景観の変化に対する憂慮が常に働いていたことは否めない。おもに民間人を主体とした城郭研究は、こうした問題意識が根底にあり、現在に至っている。近年は地表面観察による「縄張り図」の作成を積極的に進め、これを基礎資料として城郭遺構の検討材料を集積している。

このように城郭研究は民間人が興味を持ちやすいこと、参加しやすいことが強みとなり、80年代に大きな潮流となって姿をあらわしてきた。しかし、90年代に入ると急速に集積してきた縄張り図の量を前にして、これをどのように評価し、考察を続けていけばいいか、大きな壁にぶち当たっている。各自の経験に基づいて行ってきた縄張り図の作成は、かえってそれが仇となり、相互に議論を蓄積することが難しくなってきている。[1]

言うまでもなく、城郭遺跡も、考古学（発掘調査）の検討対象のひとつに過ぎない。これが「城郭研究」という独自の形でまとめられてきたのは、前述した城郭を愛好する民間研究者が、大きな潮流として存在することによる。本稿で述べる「城郭研究」も、あくまでも、こうした非埋蔵文化財担当者による城郭の縄張り（平面構造）を把握する研究分野として限定的に使用する。ただし、これはあくまでも両者の間を明確にしようとする意図

からではない。現在抱える問題は、こうした立場の相違のみが先行して、同じ城郭遺構という「もの」を検討する土壌が育成されてこなかったことである。最近の縄張り研究の進展を批判的に継承して、平面構造の重要性を認識しつつある埋蔵文化財担当者も増えてきている。また城郭跡発掘独自の方法や問題点も検討されてきた[2]。つまり、城郭を平面構造から把握しようとする縄張り研究と発掘調査を分ける必然性がなくなってきた。こうしたなかで非埋蔵文化財の研究者が縄張り図による作図で、どの程度発掘の仮説的資料になり得るか、さらには独自の論理を導き出せるか、突き詰められているといえよう。

本稿では、遺跡と格闘してきた考古学の方法との比較検討を通じて、地表面観察による縄張り（平面構造）の把握と考察方法を振り返り、城郭研究のいくつかの問題点を考えてみたい[3]。

II．問題の所在

近年、城郭遺構の基礎資料の蓄積のため、縄張り図を書くことは、ほぼ全国的に認められつつある。しかし、図を書くことによる本来の成果はどの程度まで到達しているだろうか。例えば、最近注目された「村の城」論[4]などは、おもに文献史学による考証や成果に裏打ちされている内容であり、遺構の考察から得られた結果以上に研究者個人の問題意識先行の観が拭えない。もちろん「村の城」論自体は村の住民の主体性を視野に入れた点で、視角や問題提起としては、きわめて貴重である[5]。ただ立論の基礎が、村の住民が危機意識にたち、階層差をなどを越えて、城を保持させる面であること[6]を勘案すれば、城郭遺構の研究独自で、文献史料の解釈のように村内部の合意のシステムを検証することは至難の業と思われる。これは発掘調査でも、解釈の困難な問題であり、各自の方法論によって得手、不得手があることは充分認識すべきだろう[7]。それを知った上で、なお、この問題に遺構論で取り組むとすれば、地道な城館遺構の悉皆調査のなかで相対的な評価が基準となり、現存遺構にあらわれる村に密着した城の普遍的なあり方や城館遺構と村落との立地関係、さらに地域間の比較検討が不可欠になると思われる。間接的にしか住民意思の問題は解きえないが、遺構論からの村と城の関係をみる上での基礎資料にはなるはずである。しかし、今までは現実には結論を急ぐ余り、城郭遺構から実証しようとする資料学（史料学）的な議論は、むしろ後付け的な役割しか果たさず、適合的に処理するケースが多かった[8]。

こうした側面が表れる責任は、城郭研究者側自身が遺構を各自の歴史像や地域史のなかで「添え物」的な役割に限定してきた点にも求められよう[9]。城郭遺構から既成の成果を相対化させたり、遺構研究独自の論理を開拓するような方法論の構築が今後必要と思われる。

そのために城郭研究は城郭遺構を「もの」として取扱い、研究者が書く「縄張り図」を、

資料化して、これを考古学的に分類していく作業を進めなければならない。考古学の世界では自明の事柄ではあるが、城郭研究側では縄張り図を「もの」資料化することに抵抗があり、分類や検討する前に各自の歴史像に当てはめる場合が多かったように思う。「もの」から考える「広義の考古学」であること[10]を自覚し、急速に集積しつつある縄張り図を評価し考察をする基準の確立を各自が模索せねばならない。

現在、こうした縄張り図の資料学が、改めて再認識させられる背景として、進展著しい中世考古学の存在がある。城郭（城館）遺構をめぐる考古学の環境は最近様変わりしつつあり、発掘調査の独壇場だった中世全般の居館研究の蓄積[11]に加え、朝倉一乗谷城下町や安土城など、史跡整備を基本とした学術調査の進展、織豊期城郭研究会など城郭出土遺物による検討の深化[12]なども注目されている。こうした動向には、社会史の進展で生活面に強い中世考古学が期待されていること、検討の軸になるべき中世遺物編年の進展していることなどが要因にあった。

以上の経過から、当然のことながら、地表面観察（城郭研究者）、発掘（考古学者）からなどによる学際的研究が望まれるわけであるが、それは決してやさしいものではない[13]。各自の方法論の特性を明確にした上で、その方法の範囲をできるだけ突き詰める必要があるからである。遺物を絶対的な評価基準として、編年などの論理を構築している考古学サイド（発掘）は、こうした作業を従来から進めているが、城郭研究者による資料学の基準は模索の段階であり、確立されているとは言えない。発掘のための仮説的作業という範囲を越えるためには、縄張りという平面構造から遺構を検証するための資料学の方法を研鑽することが求められている。

そこで、Ⅲ章で資料としての地表面観察による縄張り図の特質と蓋然性について、Ⅳ章で縄張り図に基づいた各方法を振り返り、Ⅴ章では、かつて城郭研究の批判の中心とされた非軍事面に関する問題について考えてみたい。

Ⅲ．地表面観察と発掘調査

まず、さまざまな方法を駆使する発掘調査に対して、地表面観察による縄張り図は、どのような利点があるのだろうか。

第一に城館遺構の構成要素である曲輪、土塁、堀切、竪堀などを図示することにより、その範囲を確認できることである。広い面積である城館を発掘する場合、緊急発掘が主流であるため、曲輪あるいは城域の一部という部分発掘になることが大半である。限られた発掘調査部分を遺構全体の中で位置づける場合、こうした縄張り図（概念図）は実測図とあわせて作成することが不可欠である[14]。

また、縄張り図の考察は、遺構評価の基礎資料になる。[15] 後述するように城郭遺構を平面構造の視角から型式学的に検討することで、独自の分野を占めることができ、これによって発掘で得られた成果を相対化できる可能性を持つ。特に遺物では説明しにくい軍事的な施設の評価に威力を発揮する。1980年代半ばに、近世の軍学では認識されなかった「畝状空堀群」が、中世末期の普遍的な防御施設として確認されたことも、こうした動きを反映する。

第二に、一つの地域において万遍なく遺構の確認ができ、その規模の比較検討で、分布論が立てられることである。発掘成果や文献からの考察は、どうしても点景になりがちになるのに対して、濃密な悉皆調査は地域における遺構の傾向を知りえることができる。城郭の平面構造を通観した場合、地域性が反映されることがあるが、その地域に準じたものであるか、特殊なものであるかは、こうした悉皆調査を通じて初めて確認でき得る。規模やプランの特色を抽出すれば、それは何らかの歴史的背景を示すものと想定でき、やはり発掘調査で得られたデータを地域的な視角から再検討することが可能になると思われる。

ただし、地表面観察による調査には、当然限界も数多く存在する。まず、第一に地表面部分のみの評価になることから、最終段階の遺構面しか考察できない。すなわち層位論的な検討は、当然ながら不可能である。意識的に埋められた部分などは、発掘による調査を進めなければ無理である。

第二に生活面に関する研究については、発掘調査の成果に依拠せざるを得ない。建物配置、生活の営みに関する情報は、当時の人間の日常性を知る上で、根本的な部分であり、こうした点については地表面観察の研究者は推定は述べられても、断定は下せない。城郭は有事に使用されることから、非日常的構築物と捉えられ、それが軍事面の評価を強める要素となり、縄張り図の相対的価値を高めていた。しかし、発掘では居館をはじめ、生活空間を持つ城郭遺構も検出されている。また、非日常性の部分を、当時の人々の生活空間のなかで位置づけていく関心がなければ、中世史のなかで、やはり一面的な評価にならざるを得ない。もっとも埋蔵文化財担当者でなくとも、表面採取による遺物の考察を進めている研究者もおり、曲輪の性格把握などに役立てている。[16] ただ、出土遺物の量的な把握、出土状態の確認、層位学的な評価については、組織的な発掘が不可欠である。面的な発掘は、当時の城郭における生活面という人間の基本的な行動様式を評価し得る。

以上、自明のことを整理したが、地表面観察の利点と限界を考えると、一個の城郭を考察する場合、地表面の仮説の後、発掘調査によって検証していくことが不可欠である。[17] しかし、発掘していない城郭遺構も射程に含めれば、少なくとも縄張りにおいては、考古学と同じ土俵に上がれると言える。したがって「縄張り図」を書くというレベルと、縄張り（平面構造）の解釈で考えていく「縄張り研究」のレベルは切り離しておかねばならない。[18]

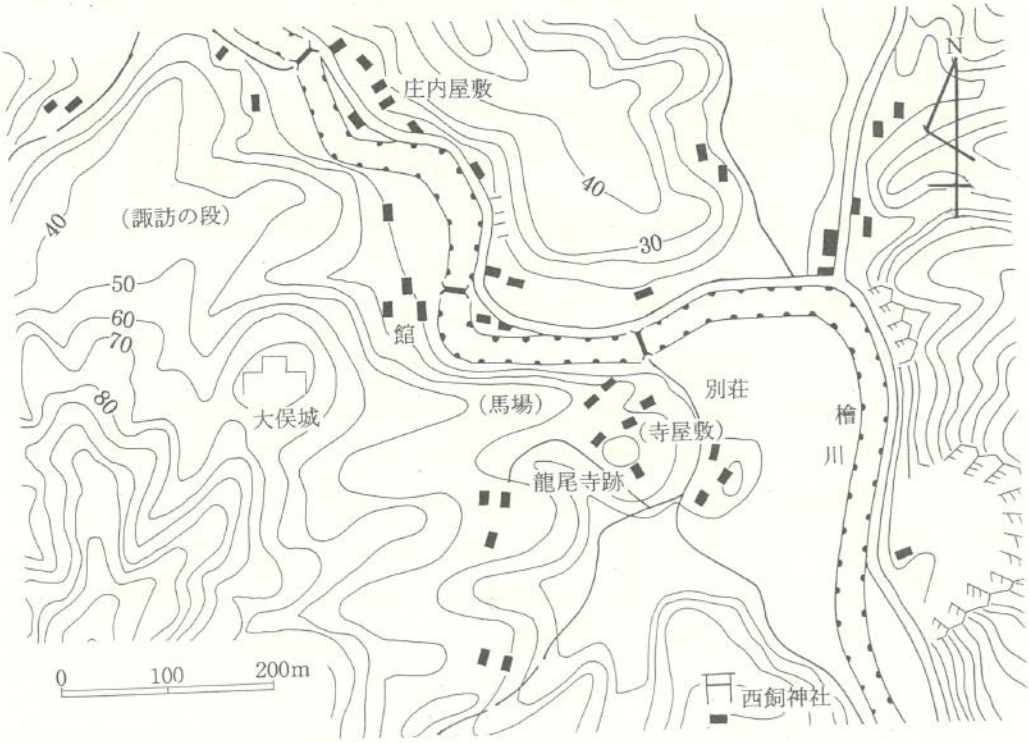
そのように考えると、発掘によって得られた地表面の成果の確認や修正の過程を真摯に受け止めることにより、縄張り研究自体のを補強していく模索も大事であろう。

ここで、地表面観察で書かれた縄張り図の蓋然性と、これをもとにした考察がどこまで発掘調査成果に耐えうるか、という問題の一端を考察したい。その事例のひとつとして、丹後大俣城を取り上げる。[19]

丹後大俣城（京都府舞鶴市）は由良川へ流れ込む檜川流域の右岸に位置する山城遺構で、標高85mの山頂を中心とする（第1図）。地形的には大江山より続く山塊から突き出た尾根の突端に位置するが、この突端部分は高くなっており、鞍部の存在によって独立した小山になっている。城主については浮橋氏、岩田氏、荒木氏の三つの説が伝えられているが、明確なことはわからない。[20]

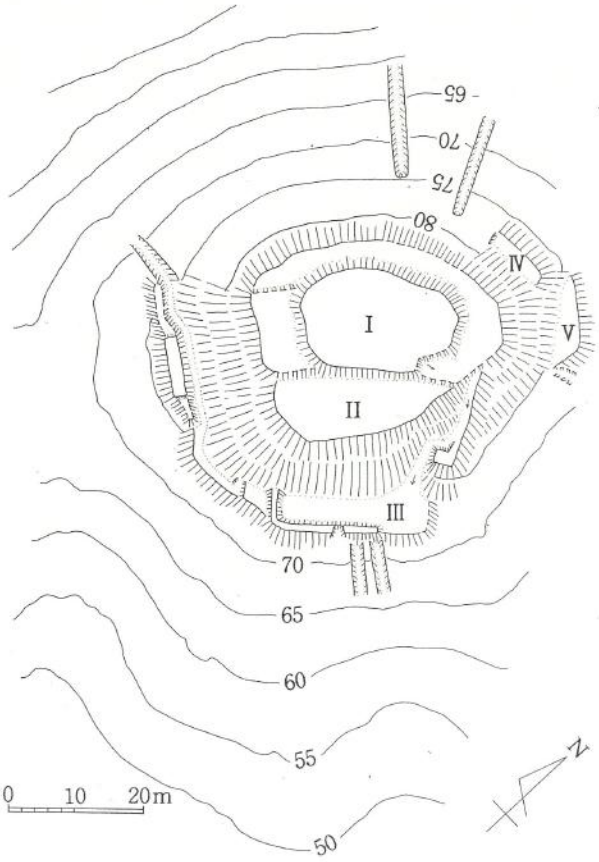
この大俣城は、京都縦貫自動車道の敷設に伴う発掘調査が行われることになった。筆者は開発に伴う緊急調査であり、地表面観察の基礎的なデータを提出することは決して無駄ではないと思い、[21]表土を剝ぐ以前の状態から、縄張り図の作成を行った（第2図）。まず最初にその表土の状況から見た縄張りとその若干の考察を記しておきたい。[22]

前述したように大俣城の遺構は檜川沿いの山頂に位置する。土砂などは人為的に剝がさ



第1図　丹後大俣城周辺図

れた形跡はなく、きわめて良好な状態で残存していた。確認された曲輪は、大別して曲輪Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴの5つ存在する。楕円形を呈する曲輪Ⅰは、山頂部分を占め、城郭全体でも中心に位置することから主郭に相当する。周囲には幅3～10mの曲輪Ⅱ（帯曲輪）が囲繞している。なお、曲輪Ⅰの東縁の切岸が不明瞭で、この緩斜部分が曲輪Ⅰから曲輪Ⅱへ降りる箇所と推定されるが、堆積の可能性もあり地表面段階では躊躇した。次に曲輪Ⅱから曲輪Ⅲへ降りるが、このルート上には、食い違い虎口が明確に残っている。この箇所は曲輪Ⅱの側壁を削り込む勢いで形成されており、かなり無理をして築かれたことを彷彿させる。大俣城の縄張りでもっとも技術的に進んだ箇所である。この虎口を出ると曲輪Ⅲに達する。Ⅲの西縁にはこれを半周する形で土塁が設けられていた。また側壁には竪堀が二本確認できた。またⅢから西へ斜面上を回り込むと堀切がある。ただ、曲輪Ⅲとの間にわずかに残る帯曲輪があり、堀底道に使用した可能性がある。山の北東側壁には、小規模な曲輪Ⅳ、Ⅴがある。



第2図　丹後大俣城　縄張り図

さて、麓との関係であるが、Ⅲの東から延びる尾根上に集落、字「別荘」があり、その縁に通称「寺屋敷」と呼ばれる一角がある。聞き取りによれば、ここで大きな甕が出土したと伝えられる。また、その間にある墓地周辺は通称「馬場」と呼ばれていた。一方、曲輪Ⅳ、Ⅴは前記の曲輪群から高低差があり、明確に位置づけられない。ただし、直下の麓には「館（たち）」と呼ぶ敷地があり、大俣城主の子孫と称する岩田氏が在住である。また「館」から檜川を挟んだ対岸を「庄内屋敷」、南東の丘陵を「諏訪の段」と呼んでいる。

以上のように縄張り図作成による遺構の評価には、すでに主観が入る点もあるが、プランの基本である曲輪の平面的な配置は追求でき、最低でも城域は確認できる。また、聞き取りによる通称名などの確認作業によって、城を山麓の村落から位置づける視角を持ち得

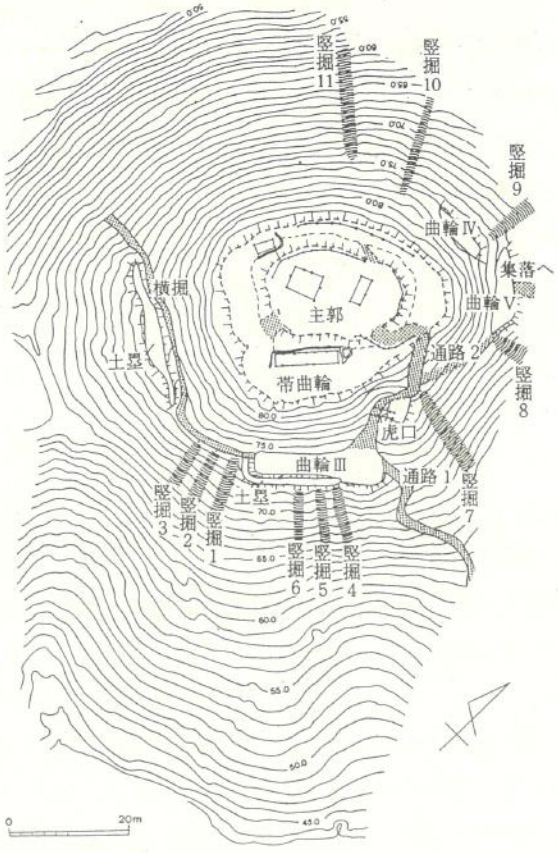
る。

次に、この縄張り図を素材として解釈を加え、若干の考察を行う。まず、縄張りのうち、ⅠとⅡが中枢の曲輪であることは間違いない。両方とも土塁は設けられていないが、削平は明瞭である。一方、曲輪Ⅲは土塁が半周し、斜面には竪堀2本が築かれている。このことからⅠ・ⅡとⅢとの曲輪の性格の相違が浮かび上がってくる。また、両者の間には食い違い虎口が設けられており、築城主体が意識的に分けた観がある。城郭自体の規模は比較的小さいが、こうした城郭の中枢部分と土塁・竪堀を用いた軍事的部分の機能分化がされていることは、充分推定できる。現段階において、周辺の城郭との比較検討を行っていないため、明確な考察はできないが、大体において「館」の存在と城郭規模から察して村落に密着した在地領主の城と考えられる。そうすると、在地領主クラスの城を基本形とするなかで曲輪の機能分化が深化した遺構と位置づけられる。年代については、食い違い虎口が設けられていること、畝状空堀群とはいえないまでも、竪堀が2本連続で設けられていることから、16世紀半ば以降と推定される。[23]

以上、大俣城の地表面観察による縄張りの確認と考察をまとめてみた。ただし、あくまでも地表面での評価のため、地下遺構の検出によって、考察対象とした縄張り自体も砂上の楼閣と化す可能性は存在する。さらには、縄張りに基づいて得た考察も意味を失ってしまう。それでは、その発掘調査はどのような成果を収めたであろうか。

大俣城は、確認された城域すべてが自動車道にかかってしまうため、ほぼ全体的に発掘がなされ、調査自体は有意義なものとなった。これにより、曲輪構成自体も発掘調査で確認できる希有な事例となった。

まず、曲輪の輪郭および配置は地表面観察とほぼ同様の結果が得



第3図　丹後大俣城遺構検出状況（註19より）

られた（第3図）。曲輪Ⅰとそれをめぐる曲輪Ⅱ（帯曲輪）もほぼ同様に検出された。これはこの地が山頂ということもあり、土砂の堆積や後世の攪乱を受けてなかったこととも関連するだろう。これに追加しての成果としては、やはり埋没遺構が確認されたことであろう。曲輪Ⅰでは2間×3間と2間×1間の掘立柱建物跡2棟が検出された。また、帯曲輪でも建物跡がやはり2棟確認されている。両方の曲輪縁には柵列も工夫して設けられ、建物配置の規格性よりも自然地形を利用した様子がわかる。さらに筆者が躊躇した曲輪間を丁寧に掘ることにより、柵列の入口が確認された。一方、これに対して曲輪Ⅲからは柱穴等は検出されず、建物跡は確認されてない。これは曲輪別における遺物の分布にも反映されている。大俣城からは在地産の瓦質摺鉢、丹波焼の壷、石臼・茶臼の破片、炭化穀物、さらには瀬戸・美濃系の天目茶椀、灰釉陶器の皿、中国製の青花の椀・白磁の皿などが出土しているが、このうち大半が曲輪Ⅰ、Ⅱおよび北斜面からの検出である。相対的に曲輪Ⅲからの遺物出土は少なかった。また、曲輪Ⅰ・ⅡとⅢを隔てる食い違い虎口では、これを形成する土壇が半分盛土で築かれ、通路の基底部には一対の柱穴が検出されている。

以上のことから、地表面観察の段階で推定した曲輪Ⅰ・ⅡとⅢの機能分化は、発掘による建物跡の有無の確認と遺物出土の分布を通して、より強く補強されたことになる。地表面観察によって見通しを立てる意味が活きた事例になるであろう。[24)]

しかし、当然ながら発掘によって、地表面観察の評価を一新した部分も数多い。前述した曲輪Ⅰの入口に加え、曲輪Ⅲの南側壁からは竪堀1、2、3が検出された。これは地表面からはまったく確認できなかった。実際表土を剝ぎ、地山面を検出したこの箇所は風化が激しく、竪堀を形成する両脇の土塁側肩上部も残っていない状況だった。今回は斜面の面的な発掘によって風化を耐えた基底部まで掘り込んだことにより確認された。曲輪ⅢのL字形の土塁が竪堀1に横矢を掛けるようになっており、今後遺構の切り合い関係から、より詳細な考察を加えるべき部分であろう。ちなみに竪堀4、5、6は曲輪Ⅲを形成する盛土上にあり、発掘で基底部が確認できなかった。[補註1] したがって、地表面の現状からの評価になっている。

発掘で新たに確認されたもうひとつの点は、曲輪間を結ぶ通路1、2の確認である。地表面からⅣ、Ⅴは離れた曲輪として評価していたが、やはり斜面の発掘で、斜めに下りる通路2が確認され、主郭などと曲輪Ⅴを結ぶルートが明らかになった。曲輪Ⅴからは館へ下りるルートがあり、ここに館と有事の際の詰めの城的な存在だった山城との通路がほぼ明確になったといっていい。この通路2は曲輪Ⅱ（帯曲輪）の下から発するが、ちょうど食い違い虎口の内側より斜面を下りており、現状では食い違い虎口を通って、尾根上を下る通路1と分岐している。通路2と1の時期は時期差があるのか、併存する時期があるのか、今後の詳細な報告書に期待したいが、少なくとも城と麓（城下）との有機的な関係を

考える一資料になったことは間違いないだろう。

やや冗長ながら、大俣城という一城郭跡を素材に地表面観察の縄張り確認、考察と、発掘による詳細調査の一致点と齟齬を記述してきた。ここで、評価のまとめを箇条書きにしておく。

(1)曲輪など削平地については、地表面観察と発掘には、大きな相違はでなかった。ただし、表土を剝いだこと、トレンチなどによって盛土部分を確認したことは土木構築方法や地下の遺構面を明確にした意味で重要である。

(2)縄張りを確認した上での考察においても、発掘調査の成果は予察を裏づける補強材料になった。曲輪Ⅰ・ⅡとⅢとの性格の相違など、建物跡の検出の有無や遺物出土の分布から、より明確さの度合を増した。こうした縄張り構成は、他の同類のタイプの城を考察する上での基本的な見通しを与える。

(3)遺構評価で、もっとも発掘調査の独自性が明瞭に出たのは斜面の調査においてであった。風化した竪堀の確認、曲輪間の通路の検出などに威力を発揮した。風化や堆積しやすい部分の評価は難しいが、竪堀底の基底部を明確にすることで明確に位置づけられた。

(4)一方、盛土部分は竪堀の基底部が確認しにくく、結局地表面による確認が判断の基礎となっている。こうした確認しにくい部分の評価は、発掘担当者の経験が左右する側面も存在する。

前述のまとめはあくまでも、大俣城での結果に過ぎない。遺構の発掘は、その立地や土砂の堆積状況、後世の撹乱などに大きく左右されるから、一般論にはなり得ない。重要なことは、現場担当者にとって、地表面観察と発掘の成果を切り離して考察することはできないことである。緊急発掘の限られた時間のなか、あらゆる側面を想定した上で、検討する必要がある。その意味で、今回記録した作業自体、すなわち発掘以前の縄張りと発掘後の形跡の追求は、埋没・風化した地下遺構との一致と齟齬の両方を確認する意味で、今後の研究の一材料になると思う。

さらに、地表面観察では明確にできなかった通路や竪堀などは、斜面部分における面的な発掘の重要性を再認識させよう。今まで、生活遺構の摘出が主で曲輪等の平坦地が発掘対象の中心であったが、地表面観察の縄張り図の限界部分を補完するのが、むしろ斜面部分であったことは重要である。生活遺構において力を発揮するのみでなく、縄張り図の弱い点を知ることで、発掘調査の利点をより認識する必要があろう。通路など斜面部分の評価は集落などの生活空間から離れ、高低差のある山城を築く理由を解くひとつのきっかけにもなる。[25]

もうひとつ大事な点は、曲輪Ⅰ・ⅡとⅢとの機能分化の指摘が、発掘調査でも一致したことである。縄張りの現況の確認に加え、曲輪構成の解釈が地表面段階でも一定の成果を持ち得た。地表面段階の解釈は、発掘調査から見れば「仮説」の域を出ないかもしれないが、前提作業として、周囲の城郭跡における機能分化の状態を確認していけば、「仮説」の重みも変化していくことは認識しておくべきだろう。

さて、発掘以前と以後の資料化は、縄張り研究にとっても重要な意味を持つ。一般に縄張り図の作成・評価に大きな個人差があり、不均等なデータ化が批判の対象としてあげられる。実際、縄張り図には各研究者の個性を大いに出し、論文に匹敵するものだという意見[26]が現実に存在する。解釈が明確に入るため、城郭研究者側が詳細な縄張り図をつくろうとするあまり、過大評価や、後世の改変を読み取れない箇所が出てしまう[27]。充分に禁欲的な態度で遺構評価を行うことが肝要であるが、意識的に城郭遺構と評価する限り、研究者の態度に期待することには無理がある[28]。むしろ、発掘成果との一致点と相違点を明確に出していくことで、より客観性を指向していくことも今後の課題になる。発掘成果の有効な活用で、縄張り研究の補強を模索する道も探求すべきだろう。

以上、取り上げた点は、ひとつの城郭遺構の資料化にあたっての問題であったが、これのみに縄張り研究が没頭するならば、あくまでも発掘調査の前提となる基礎データ収集という範疇に収まることになる。いわゆる縄張り研究と呼ばれる地表面観察の独自の境地を開くには、言うまでもなく、資料化した材料を考察し、ある一定の視角から比較検討する作業に移らなければならない。

それでは、こうした縄張り図をどのような方法論で解釈し、考察材料にしていくかを次に考えてみたい。

Ⅳ．縄張り図の評価と方法

縄張り研究と発掘調査の間で、よく議論されているの問題のひとつとして年代観の相違がある。縄張り研究のもっとも真価が発揮されるのは、縄張りの発達がもっとも進展した16世紀以降である。すでに松岡進氏が、地表面に残る遺構は最大限拡大しても16世紀以後のものであり、あくまでも戦国期以降と疑ってかかる立場を堅持すべきと述べている[29]（このことは逆に15世紀以前の城の編年的研究の限界を示唆する）。こうした点から、今まで縄張り研究では、虎口空間（内枡形なども含む）や食い違い虎口など、虎口の総花的な発達を、16世紀中葉から後半への展開をひとつの指標としてきた。しかし、近年発掘調査のなかでは、この年代観と相違する遺構評価を下す場合も出てきている。例えば下総笹子城（千葉県木更津市）の発掘調査では城域の内枡形虎口が16世紀中葉には機能停止している

ことを明らかにしている[30]。また、伊勢山田城（三重県東員町）でも中枢部の東縁に位置する枡形虎口が遺物の評価により、16世紀前半の時期という評価が下されている[31]。こうした遺物との年代観のズレは、縄張り研究の編年を再検討していく契機を促しつつある。しかし、同時に今一歩、土器・陶磁器流通の地域的偏差や伝世の問題など再考する可能性は残っている。さらに、16世紀後半に遺物がなかった場合にせよ、生活面を伴わない城郭改修なども留意しておく必要があり、城郭出土遺物の独自の評価の仕方などを考えていかねばならない。同じ城域内のうち距離を隔てた遺構間で、接合関係や同一個体などの破片があること、あるいは土塁内部に遺物が混入していること[補註2]、などは生活空間として機能した後の、土砂の移動の大きさを示している[32]。大規模な新たな改修や廃城行為によって、生活を伴う面（遺構面）を撹乱することを常に想定すべきである。

根本的に城郭、寺院、墓地等の中世施設自体の配置や構造は、当時の社会的環境や人間関係を傍証する資料となる。そのものが持つ機能や社会的位置を考えた場合、遺物のみの年代観だけでなく、常に構造面における検証が不可欠である。これは編年の問題だけでなく、機能差・階層差でも同じである。様々な「もの」を根拠として検討していく作業上、各方法の見解の相違は、当然の帰結になるだろう。

ここで、重要なことは、こうした縄張りという城郭のプランに基づいて、どの程度方法論を確立できるか、である。言うまでもなく、考古遺物の評価は徹底した「もの」の分類によって年代観の指標を得ている。これに対して、縄張り研究は、こうした作業をどこまで、突き詰めているだろうか。実は前章に取り上げたような遺構の資料化にのみ集中し、個別事例の報告のみに終始していないだろうか。厳密な考古遺物の編年に対するには、集積した縄張り図をどのように考古学的に分類化を進めていくかにかかっている。もの資料に独自の論理を語らせることは、考古学において、言わば自明の理であった。しかし、いわゆる城郭研究者は地域史や歴史像（城郭像？）に流された嫌いがあるように思う。論旨のなかで添え物的な資料として扱わないためにも、今後縄張り独自の方法論を深化せねばならない。

そこで本章では、こうした縄張り図による城郭プランの類型化に関する研究をいくつか、通観してみたい。

縄張り図で基本的な確認作業として、曲輪の評価がある。曲輪は城郭の屋敷地や陣地として利用される平坦地であり、当時の城内の人たちが生活や駐屯した重要部分のひとつである。まず、この曲輪の配置を模式化しようとする動きが見られた。出宮徳尚氏は城郭図にある一定の客観的要素を抽出した上で、城郭遺構の平面構成を検討する基本の指標を確立しようとした[33]。その材料として備前国の戦国期山城を取り上げ、曲輪の個々の性格を主郭A、副郭B、付属郭C、付属施設dの四つに記号化し、その構成状況を模式的に図示し

（第4図）、その上で以下のように六分類する。

(1)一類　主郭単一型：単一の主郭と少数の付属郭等から構成される。

(2)二類　副郭付き単一主郭型：単一の主郭と少数の副郭等から構成される。

(3)三類　羅列的主郭複合型：単独の主郭や単一主郭型等が地形に沿い単純に羅列される。

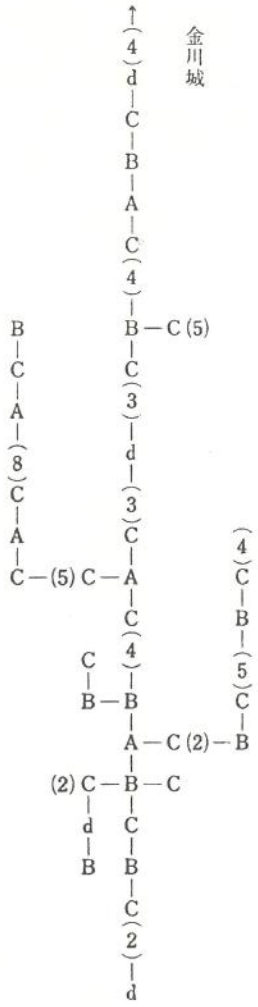
(4)四類　中心郭群複合型：主郭等の中心郭群と半自立的戦闘機能を持つ副中心郭群が並立している。

(5)五類　多極中心郭複合型：多極化した中心郭群と副中心郭群が相関的に複合体をなす。

(6)六類　中核付中心郭群複合型：中心郭群と中心郭群複合型との複合体。

出宮氏は現状遺構を一元的に捉える形態分類の観点にたち、あえて年代性を無視して、維持主体（いわゆる城主）の社会的・階層的な到達性と成長度に焦点を絞っている。これらの曲輪配置から確認できた六類型は、領主の階層差を見る指標として位置づけようとしたのである。結論的には六類の城が三・四・五類の城の糾合上位にあり、その下に小領主層の一類・二類の城が位置づけられるとした。

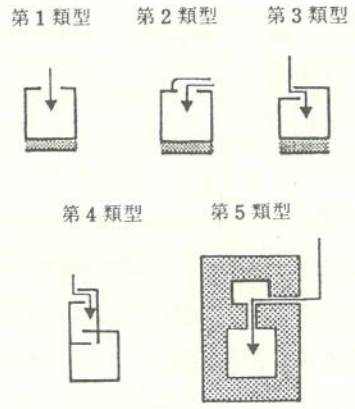
もっとも出宮氏の方法では、曲輪配置を左右する自然地形の制約の問題を処理しきれていない。そのため曲輪配置の類型も、自然地形の遇発性という批判に耐え切れない。また当時の研究状況を反映して、技術的な視角に立った評価が不充分で、曲輪間の上位・下位の問題が汲み取れていない。そのため、各城郭をどの類型に相当するかという点は、やや恣意的にならざるを得ない憾みを持つ。しかし、ここで我々が学ぶべきことは、分類の方法論としての提言と構造的組立てを強調された姿勢にある。城郭遺構を独自の視角で記号的に分類する方法は、結論がやや図式めいた点もあるが、文献等で語られる地域史をいったん突き放した上で、縄張り図を徹底して分類整理し、その独自性を開拓しようとした動向は重要である。



第4図　出宮徳尚氏の城郭構成図式（備前金川城の場合、註33より）

こうなると、自然地形の影響を受けず、より人為的な部分の評価に注意が払われる。城郭遺構のなかで、人為的な技術

がもっとも端的にあらわれる虎口に着目した検討が80年代中葉からさかんになった。これらを体系化して、縄張り編年で挑んだ作業として千田嘉博氏の織豊系城郭研究がある。千田氏は織豊権力が及んだ城郭の縄張り図を集積し、城郭遺構の虎口の変化を着目して、五類に型式分類する[34]（第5図）。



第5図　織豊系城郭基本モデル（註14より）

千田氏の編年案の特質は以下のようにまとめられると思う。第一に不要な情報を思い切って排除し、編年に有効な部分のみに抽出して、型式概念を構成したこと、第二に分類の基準を虎口部分における折れと空間の数で示し、他者にもわかりやすい形で表したこと、第三に城郭全体の変化を抑える評価（堀や石垣）を保持し、属性分析の箇所を整理したこと、などであろう。70年代後半から80年代前半にかけて、各地で特徴ある城郭遺構が明らかにされ、賤ヶ岳城塞群[35]、倭城[36]など、織豊系の絶対年代が抑えられる標準化石の遺構図が集積されつつあったことも背景として見逃せない。

もっとも、体系的な検討のため、問題も多く含んでいる。第一に縄張り（平面構造）を基礎に編年案を、発掘等で確認された層位関係や遺物との検証のなかで、どう位置づけるか明確でないこと、第二に中近世移行期における城郭において、織豊系プランの「発展」の背景とする軍事的緊張の激化と、近世の「平和」化における虎口の権威象徴化[37]が自家撞着していること、などであろう[38]。

ただ、これらは縄張りをもとに編年研究する過程として不可避の課題とも考えられる。むしろ、この成果をどのように批判的に継承するか、にかかってくる[39]。

こうした縄張り図をもとにした編年研究は、ほかに戦国期の武田氏をまとめた萩原三雄氏[40]や後北条氏をまとめた八巻孝夫氏[41]によって進められている。今後、素材の模式化と型式組列の作成が大きな課題となろう。同時に織豊系プランとの包摂についての問題をどう扱うかが鍵となろう[42]。

今後、一旦歴史像や地域史と距離をあけ、遺構本位でこうした編年研究を積み重ねていく必要がある。ただ、地表面観察による編年研究が、やはり16世紀中葉～後半（戦国後期）に集中していることは留意しなければならない。いわゆる中世城郭の縄張り研究の編年作業は中世全般を見通した場合、きわめて時期が限定されている[43]。これらは地表面観察が最終段階を示す縄張りのみしか追求できないこととに起因する。さらに型式学として整理する場合、型式の単純から複雑へというまとめ方にならざるを得ない点[44]にも、特質があらわ

れている。

また、編年の基礎単位が織豊政権や戦国大名など広域の権力体の枠ごとにまとめられることも特徴の一つになっている。こうした編年の基準になる城郭遺構は、やはり地域史のなかで特殊な位置を占め、それゆえに資料化しやすい側面があった。ただし地域史のなかで描こうとする場合、外部勢力の進出や影響は追求できても、当時の地域住民の動向などは評価しにくかった。資料学としての編年研究に偏重すると、村落に密着し、一般に技巧性が乏しいとされた小規模城館は、どうしても検討材料として低位に位置づけられた。[45]

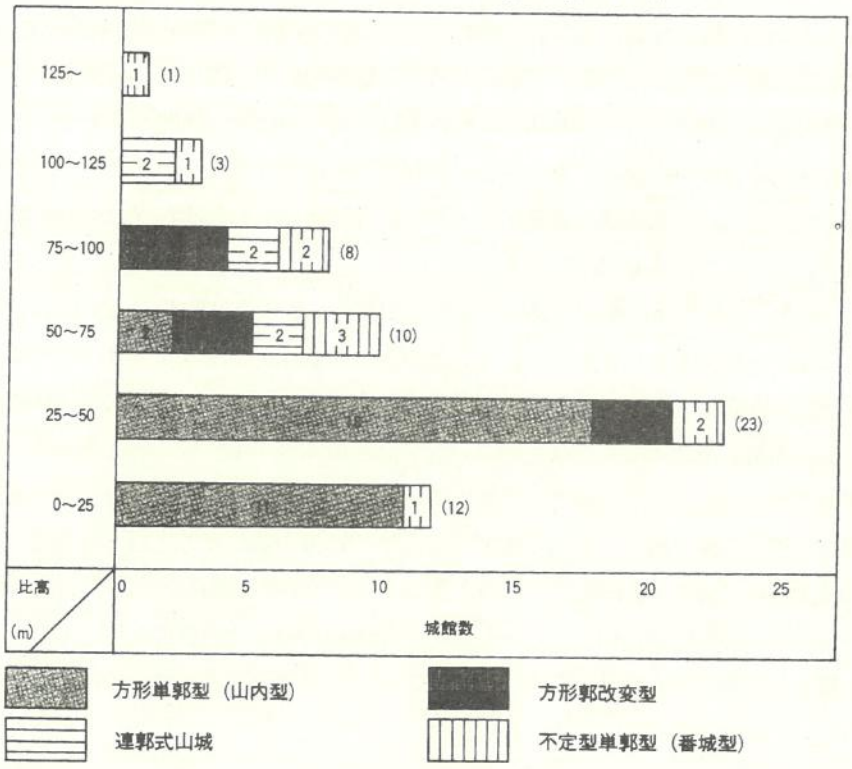
こうした小規模城館を独自に検討する方法としては、縄張り図の利点のところでも触れた分布論が仮説的検討として有効である。

その事例として大和東山内地域の城館の研究史をあげてみたい。東山内は奈良盆地の東に広がる大和高原周辺を指し、隣接する伊賀・甲賀と同じく、小規模な方形居館が濃密に分布する地域である。伊賀では早くから県レベルの悉皆調査が行われ、[46]尾根の先端に掘り刻まれた方形居館や方形を指向した単郭山城が濃密に分布していることが知られていた。こうした社会的背景として、中世後期、在地土豪が横に連合する地域的一揆体制[47]があり、伊賀惣国一揆や甲賀郡中惣があげられていた。

まず、村田修三氏は東山内地域の城館悉皆調査によって、その分布状況を確認し、規模を5つに分類した。[48]そして各城郭の縄張りの位置づけを行い、東山内と大和国国中部（大和盆地）の城郭の縄張りに見る地域的な差異を読み解いている。そのうち東山内の城郭では、村落との比高差が少ない土豪の屋敷を兼ねた館城（単郭山城）の築城主体を、戦国期の国人・土豪と想定し、単郭の館城の濃密分布と大規模な山城化という動向との両極分解の状況を追求している。[49]このように、村田氏は城郭遺構を、築城主体の位置づけを通して在地構造分析の一史料として位置づけたことが評価される。これを論じることが可能になるのは、縄張り論と規模に基づいた大まかな分類化が素地として存在したからである。[50]

こうした分類を、さらに多田暢久は深化させている。[51]東山内の城郭を縄張りに応じて、A：方形単郭型、B：方形不定形型、C：不定形単郭型、D：連郭式山城の4つの類型に分け、これらの分布や組合せから、東山内地域の築城主体やそれをめぐる地域環境の差異を摘出する。要約すれば、築城主体が相互に規制しあい、方形単郭にとどまった土豪連合の地域と他勢力の制約によって方形単郭さえ築けなかった地域の両方を想定している。多田の方法では、分類した城を新たに比高差別でまとめることで、村落との比高差の少ない方形単郭の濃密な分布状況を明らかにした（第1表）。従来、こうした点は村田氏からも指摘されていたことであるが、客観的なデータ化を進めていることで一層明確化したばかりか、逆に比高差に関係なく分布する不定形単郭型との対照も如実にあらわした。さらに、分布の疎から城郭構築や残存状況まで制約する村落のあり方まで、研究の射程を広げてい

第１表　大和東山内城館比高別構成（註51より）



る。

ただし、多田氏が方形単郭型を「山内型」と別称したことに象徴されるように、東山内の政治的担い手だった在地の土豪層[52]を対象の中心に据えていた。つまり、既成の文献史学の成果を意識している。前述したように、伊賀・甲賀・大和東山内は戦国期土豪が横に連合していた地域であり、単郭の館城が濃密に分布する状況は、これと照応するとされてきた。しかし、地域的一揆体制の所産として包括されたことで、逆に城郭分布の問題も地域的特質として把握されるにとどまった観がある。

もっとも、これらの地域の城郭分布が特異だったことは、同時代人の証言としても指摘できる。加藤清正が朝鮮侵略（壬辰倭乱・文禄慶長の役）の際、オランカイ（朝鮮半島の付け根）の現地の城を「為守護者無之、むかしの伊賀・甲賀のことくにて、一在所一在所構要害之付いて」と報告している[53]。村落ごとに要害を構える特異な地域として、昔の伊賀・甲賀が形容されていることは当時の武将たちに、地域の独自のあり方と映ったことがうかがえる。しかし、あくまでも織豊政権下の部将の視点という考え方もでき、簡単に文献史料の内容と同一視するわけにはいかない。

城郭研究の独自性を想起すれば、こうした分布の問題を単に地域性のみで処理するので

はなく、地域的特質と普遍的部分を明確に区分した上で、地域間の比較を進めていく必要がある。すでに前述した出宮氏が第一類型として、小領主層の主郭単一型をあげているが、これは単郭山城の問題として捉えていいだろう。織豊政権や戦国大名の城郭のような大規模化（肥大化）したり、技巧の発達する動向とは、明らかに別な展開を示している。地域の普遍的な城郭の分布を探ることで、より資料化の幅はできてくるのではないだろうか。[54] 編年研究の偏重で、特殊事例の蓄積が進んだが、今後はより普遍的な部分を地域間ごとに比較検討することを模索せねばならない。

以上、縄張りの類型化に基づく研究を見てきたが、これらの作業は、一方で自己目的化、細分化に陥る可能性も存在する。しかし、遺構から歴史像を語ろうとすれば、やはり城郭の存在形態に徹底してこだわる態度を堅持すべきであろう。他方、こうした分類にも各個人の一定の問題意識が入ることは否めない。一見機械的な作業でも、研究者個人が行う以上、理論や見方が入ることは当然である。これらの分類や解釈が恣意性を互いに確認しあう高度な論争が期待される。これとあわせて、すでに権力論などで先行した成果をあげている文献史学の成果に、各研究者がどのようなスタンスで緊張関係を保持するか、さらに、いわゆる「広義の歴史学」のなかに、いつの段階で無理のない適合性を考えていくか、きわめて難しい問題と言わねばならない。資料としての意義が試されていることを自覚せねばならない。[55]

Ⅴ．軍事面と非軍事面について

城館の基本的性格を軍事面のみで集約してよいか、という問いかけは、すでに70年代から提起されていた。検出した遺物や遺構から維持主体たる領主の階級的性格を見る視角、[56] 潅漑施設として水堀の意義、[57] 城跡の場と聖域との関連など、[58] 城館をめぐる多様な側面が提出されている。

こうした非軍事面の視角は城郭研究者よりも、考古学・文献史学の側から、提示されてきた。特に考古学は、その考察方法の特性を反映して、生活・階級・信仰などに力点を入れている。これに対して、縄張りに基づく城郭研究は他の施設と区別する点は、やはり軍事施設である姿勢を堅持している。発掘成果から軍事的要素を積極的にみていこうとする視点は、むしろ限られた状況である。[59]

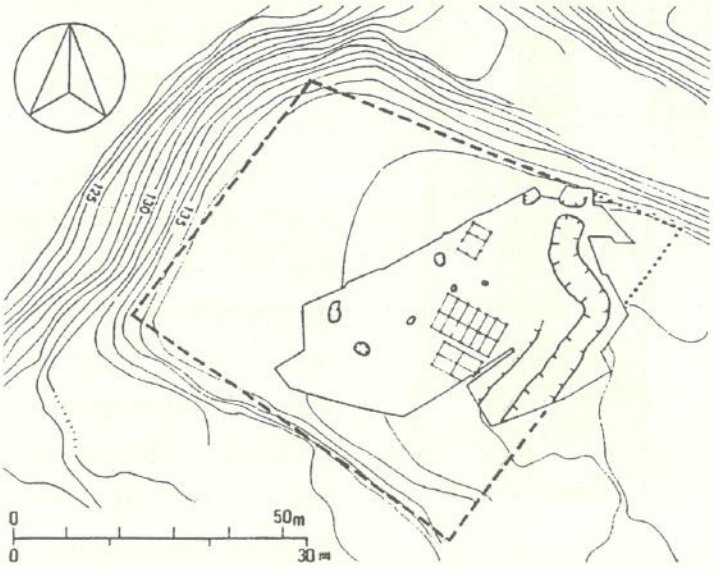
これらの問題点は、80年代後半の村田修三氏と橋口定志氏の論争でも取り上げられた。[60] しかし、いうまでもなく、生活面と軍事面は対立する概念で考えること自体間違いであり、むしろ両者の度合から幅のある豊かな城郭像を導き出すことが重要である。そのためには、いかにそれぞれの側面を実証していくか、あるいは少しでも真理に近づいていくか、が課

題になるだろう。

こうした面で、城郭研究と発掘調査が、共通の場で主体性を持った議論ができるのは、城郭の縄張り（平面構造）の位置づけからである。従来、平面構造の考察に限って見るならば、曲輪、土塁、堀の組合せから軍事的解釈が機能的に説明されやすかった。しかし、一方で非軍事的面から解釈しようとする考え方も存在する。多少揚げ足取りの評価になるが、ここで橋口氏による美作赤野館（岡山県落合町）の考察を取り上げたい[61]（第6図）。

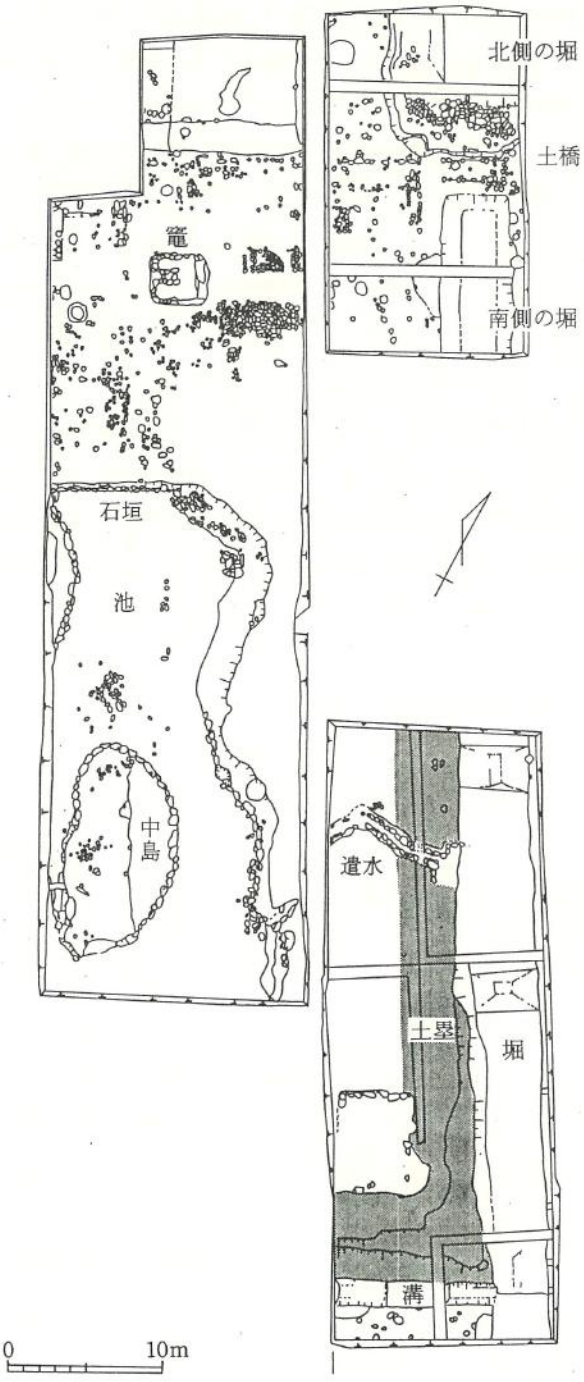
氏は赤野館の遺構を方形館プランと推定した上で、曲輪の北東縁の凹部を鬼門方向の隅欠きと解釈されている。しかし、報告書の図で見る限り、この箇所には土橋が設けられ、城の出入り口であり、明らかに横矢掛け、すなわち土橋に対する城内からの側面攻撃の機能を果たしていたことは間違いない[62]。もっとも橋口氏も横矢掛けの機能も併存しているとして、軍事的機能を決して否定しているわけではない。ただ、鬼門の隅欠きと横矢掛けの虎口がなぜ併存しているか、という点については触れられていない。鬼門によるプランの変更の問題については峰岸純夫氏も下野石那田館（栃木県宇都宮市）の測量から方形のうち、北東がやや歪になっている点をあげて、信仰面による制約を想定している[63]。ただ、自然地形を利用して、斜面を掘残しの土塁の側壁として活用しているものと解釈すれば、防御的な意味合いを持たせても矛盾はしない。

ここで、鬼門の隅欠きのような信仰面が城郭の構造に影響を与えていることを否定するつもりは毛頭ない。むしろ、軍事的環境が当時の社会構造に規定されていた以上、こうした視角は重要と考える。しかし、前述の二例にしても明らかなように、軍事的な視角で見た場合でも、充分に説明できてしまうことをどう処理するか、考えなければならない。結局、各々の研究者の視点や関心の相違のみで、明確に分かれてしまい、一個の城において本来の意味での軍事面と非軍事面の葛藤を有効に議論することはできない。



第6図　美作赤野館遺構概念図（註61橋口論文より）

むしろ、あえて城を軍事的施設であること



第7図　大内氏館跡　第13次調査遺構配置図（註65より）

を積極的に認めた上で、生活面や信仰面が軍事的部分をどのように制約し、変更せしめているのか、という課題を設定した方が、現段階では生産的な議論ができるように思われる。こうした視点を提示する有効な発掘調査事例を二つあげてみる。

まず、周防国山口の大内氏館跡（山口県山口市）の発掘調査を取り上げる[64]。大内氏館跡は室町時代の守護大名大内氏の居館で、一般に大内弘世の頃（15世紀前半）構えられたと伝えられる。現在大内義隆の菩提寺、龍福寺周辺が居館跡と推定され、1978年度から現段階まで第15次におよぶ発掘調査によって、空堀・土塁・井戸・竈・庭園遺構が検出されている。土橋両脇の堀幅の変化や土塁の痕跡など、縄張り（平面構造）の面でも興味深い事例が確認されている。

ここで取り上げたいのは、13次調査によって検出された庭園遺構である[65]（第7図）。この遺構は居館内部の東南部にあたる堀・土塁の内側で確認された。南北に長い瓢箪型の池跡をめぐって中島、景石、護岸石垣などが検出され、池の掘削土で盛った築山が土塁に乗りかかるように造成されていた。築庭時期は15

世紀末～16世紀初頭とされている。

この池に水を引くのは、くの字状の遣水の石組みで、池の東側の空堀との間に確認された。空堀だったこともあり、遣水の水口へ水を通す仕組みは、現段階において判然としない。さて、ここで石組みの水路が露出した開渠であったことに問題がある[66]。すでに館の東縁には土塁があったことがわかっており、開渠部分の土塁は築庭の際、構築されなかったか、あるいは取り外されたものと考えられる。大内氏は、この庭園整備の際、池を構築すると同時に、外部と遮断する土塁を一部掘削したか、あるいは築かなかったのである。こうした側面は防御的な視点だけでは解釈できない。城館の軍事的要素が生活的要素に制約を受けていたことを如実に示している。発掘調査による下層遺構の確認から非軍事的要素による城館の平面構成の変更を確認できたことは、縄張り研究にも参考になるだろう。

もっとも、これは大内氏館内部に限った評価である。16世紀の大内氏の館自体が生活空間として比重が高くなることは事実であるが、外部から防衛する空間は、別に取り立てられた可能性はあり、周囲の山城遺構の構築・改修も念頭に置かねばならない。大内氏の居館のみの考察から、広い意味での山口の都市空間という視点が新たに必要になってくる。

次に豊臣秀吉による朝鮮侵略（壬辰倭乱・文禄慶長の役）の際の戦略基地となった肥前名護屋城（佐賀県鎮西町）の陣城跡について取り上げる[67]。遺構群は九州の北端、玄海灘に臨む東松浦半島に所在する。大規模な本城のほか、その周囲に陣城跡も確認されつつある。こうした状況を筆者なりに簡潔にまとめると以下の性格になると思う。

(1)名護屋城を中心に豊臣秀吉の家臣団が築いたと推定される多数の陣城遺構が、東松浦半島内において星雲状に分布する。

(2)選地は東松浦半島の台地上に個別的に構築され、陣城配置をめぐる規格性は現在のところ見出せない。したがって、安土城などで確認されているような家臣団屋敷の配置[68]とは、まったく違っており、戦時における陣城群としての独自性が表面に出ている。ただ、総構のような全体の統率を指向する施設はなく、陣城群全域で防御する姿勢に乏しい。

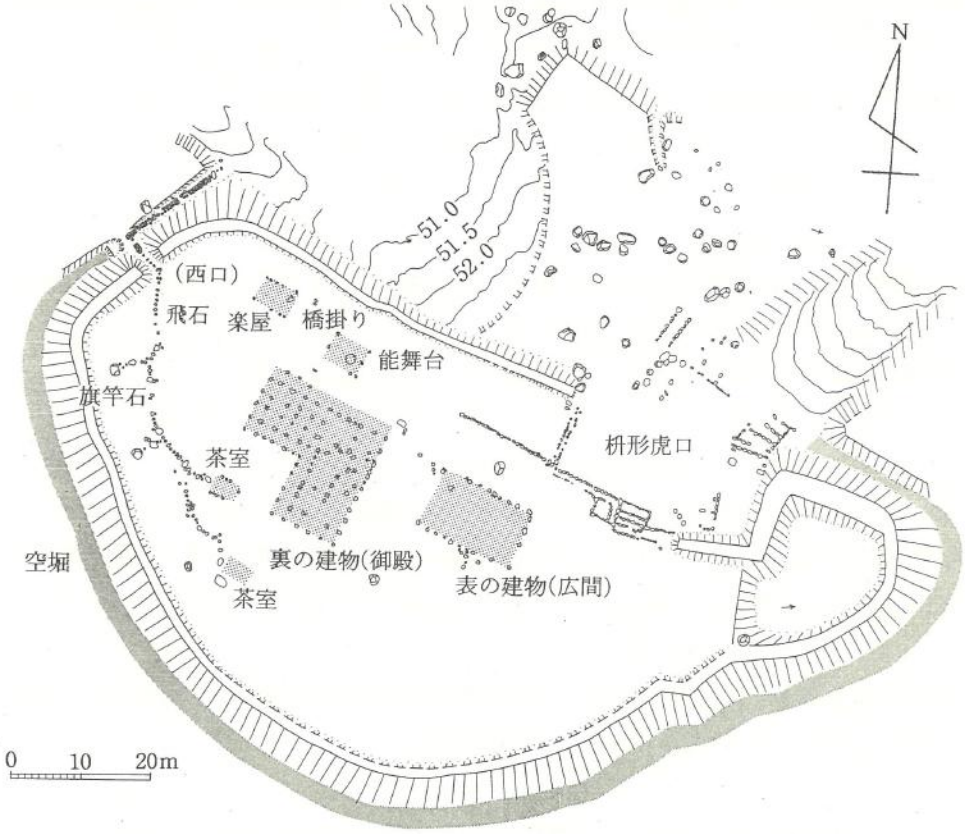
(3)逆に陣城個別のプランは規格性が高く、微高の土塁や石塁の使用、虎口空間や横堀による技巧性ある縄張りは、織豊系陣城プランの延長上に位置する。面積も広く、まとまっており、各々を一個の城郭跡と捉えて差し支えない。

(4)陣城の発掘調査では、高級品に属する陶器類の出土や茶室遺構などが確認され、生活・遊宴の空間としての側面が明確になりつつある。

こうした要点をおさえた上で、名護屋城跡の南西部に位置する堀秀治の陣跡のプランについて考察してみたい（第8図）。

陣跡は大別して「本曲輪」と「北西曲輪」に分かれる。「本曲輪」は横堀（空堀）と土塁で囲繞し、北東部に横矢掛けを設けた枡形虎口を配置している。台地上の自然地形の制約は、ほとんど受けておらず、やはり規格性の高い縄張りである。また発掘による検出では、礎石建物6棟、石段、飛石、敷石などが確認された。このうち、建物はそれぞれ接客用の広間、御殿、能舞台、橋掛り、楽屋、茶室2棟に相当するとされている。[69]

ここで注目したいのは、この茶室と推定されている遺構である。本曲輪全体のなかで、南側に位置し、独立しているこの建物2棟へは、西口（虎口？）から続く飛石が続いており、正規の出入口に相当する北東部の枡形虎口を無視した形となっている。また飛石の通路の延長には、西口から堀切底を北へ下りて石敷の道が築かれており、搦手のルートへ連なっている。トレンチ調査によれば、この石敷は既存の堀切底を一部埋めて構築したようであり、[70]新たに付設したものと考えられる。西口基底部からも飛石が検出されている点を勘案すれば、土塁を一部掘削して西口を構築したものと推定できよう。したがって、茶室へ招く通路を新たに設置するため、土塁を掘削し堀切底を埋めた可能性があり、防御的側



第8図　肥前名護屋城　堀秀治陣跡本曲輪（佐賀県教育委員会測量図をもとに作図）

面だけでは、まったく説明できない部分が出てくる。本曲輪の北東部にある枡形虎口を便宜上「表」の出入口と表現した場合、まさしく外部の客人を招く茶室への「裏」の通路が、陣城内で積極的に認められてきたことを意味する。今後、茶室建築の変遷とともに考えていかねばならないが、本来軍事的緊張のなかで発達してきた城郭の縄張りが、茶道の文化によって変更させた事例として貴重なものといわねばならない。

本来、長期におよぶ陣跡では、秀吉の小田原の陣のように、文化・遊宴の場としての機能も併せ持っていた。これらは軍事的優位を背景としたものと考えられるが、激しい攻城戦が展開したことで知られる天正6年（1578）の三木合戦でも、秀吉軍の「三喜の付城」にて、茶室が作られたようである[71]。当時の軍事的緊張と文化面を単純に対立して見るのではなく、むしろ大量の軍事動員のなかで、両者が結びついていく側面も見つめ直す必要があるだろう。その意味で、堀秀治の陣跡の発掘は、平面構造の変質から、これらの様子を伝える遺構として重要である。

二つの事例にあらわれるように、土塁などが本来の軍事的機能を低下していく過程は、今まで地表面観察では評価しにくかった縄張りの「痕跡器官」化を示している。こうした発掘調査の部分を活かし、機能が衰退していく過程も見据えていくことで、縄張り研究の射程の幅も広がると思われる。そして、一個の城跡の平面構造をめぐって、視角のすれ違いのみに終始していた軍事面と非軍事面の議論も有意義なレベルへ持ち上げることが可能なのではないだろうか。

Ⅵ．おわりに

以上、各地の発掘事例や縄張りの考察方法を紹介しながら、城郭研究と考古学の間に横たわる問題について考えてきた。最後にやや平板なまとめになるが、要点を箇条書きにて確認しておきたい。

(1)一般に縄張り研究と呼ばれる地表面観察の方法も城郭遺構という「もの」を検討する「広義の考古学」の範疇に入り、その方法的特質は城郭の縄張り（平面構造）の視角を持つことにある。

(2)地表面観察による縄張りの検討は、遺構面確認による発掘調査の前提過程のみに位置づけられるのではなく、遺構解釈とその蓄積によって、出土遺物の検討を相対化させる可能性を持つ。また発掘成果との合致や齟齬を逆に活かすことで、縄張りを考察する素材を積極的に深める必要がある。

(3)城郭研究では、近年問題意識の深化や視角の提出が蓄積として先行しつつあるが、実証

のためには、縄張り図の資料学的深化をともに進める必要がある。そのためには個別の評価のみでなく、縄張り図を考古学的な分類を通して、編年案の構築や分布論が展開される必要があり、まずは各自の問題意識や既存の地域史像と対峙する姿勢が大事である。

(4)城郭の縄張り（平面構造）で非軍事面を位置づけることは、軍事的に解釈できる側面をどう処理するかで難しい問題だが、実証を少しでも深めるためには、まずは軍事的に解釈できない部分を蓄積する必要がある。発掘調査による土塁掘削などの検出事例は、軍事面を生活・文化面が制約していた側面を示し、貴重な成果となる。

1986年、村田修三氏は「少なくとも十年後には城郭研究の主な担い手は考古学の方に移ると思います。そして城郭研究者は後景に退くであろうと思います。」と述べて、考古学や文献史学、地理学等を加えた新しい方法論の模索を訴えている。[72] 10年を過ぎた現在、城郭研究者において、こうした危機感を持った模索が、執拗になされているか、もう一度問い直す必要がある。考古学が縄張り（平面構造）を次第に摂取することになると、城郭研究者と考古学を隔てる学問的な垣根はほとんどなくなる。残された問題は、最初に指摘したような、埋蔵文化財担当者と非埋蔵文化財担当者の研究者間の相違が横たわっていることである。しかし、悉皆調査や発掘現場が万全ではない状況下で、主体的に遺跡に関わり、少しでも調査・保存の可能な状況を作り出そうとする研究者の責務は、当然ながら職能や立場を越えたものである。[73] また消滅が前提となる緊急調査が大半を占めることを認識すれば、遺跡をめぐる検証方法は、多い方が無難である。なぜなら遺跡をめぐる問いかけは無数にあり、時代の要請や研究の進展で大きく変化するからである。これを念頭においたとき、城郭研究者は、地表面観察の意義と利点を有効に活かした上で、縄張りという平面構造を基礎とした方法論の提示の仕方をさらに模索せねばならない。[74]

中世史の資料学の分野で民間研究者の比率が高い点で、城郭研究は群を抜いている。その数の多さをより有効に活用することも、遺跡の保護・啓発の前提になると思う。本来の意味での「民間学」としての力量が問われている。[75]

（大山崎町歴史資料館）

註

1）近年、各地の民間の城郭研究会では、活発に調査を展開しており、都道府県の悉皆調査の肩代わりをしているところも少なくない。しかし、80年代後半から90年代にかけて方針や運営をめぐって内部でさまざまな葛藤が出ているところもある。こうした問題の要因は一概には言えないが、各研究者の縄張り図の調査のあり方や目的などの相違が次第に表面化していることが背景にある。研究動向の変化は決して民間の研究会の活動とも無関係ではないのである。

2）例えば、山上雅弘「西日本における中世城館跡調査」（『考古学ジャーナル』 353　1992），

「城館発掘調査の展望」（『城』 150　関西城郭研究会　1994）。

3）ここでは地表面観察で調査し、ケバ等で図示した概念図を、一般通称にならい便宜上「縄張り図」と表現する。

4）横山勝栄「新潟北部の小型城郭について」（新潟県北蒲原郡三川村立三川小学校『研究紀要』昭和63年度　1988）、井上哲朗「村の城について」（『中世城郭研究』2　1988）、藤木久志「村の隠物・預物」（『ことばの文化史』中世1　平凡社　1990）。山下孝司「戦国期における城郭の歴史的立地」（『甲斐中世史と仏教美術』名著出版　1994）、研究史整理としては、市村高男「戦国期城郭の形態と役割をめぐって」（『争点日本の歴史』4　中世編　新人物往来社　1991）に詳しい。

5）今まで築城や改修のおもな契機として、領主間の武力衝突のみが想定されてきた。しかし、「村の城」論によって文献に登場しない村落間相論も意識する必要が出てきた。

6）特に藤木氏は戦国期の小型山城を村の当知行の拠点として位置づけ、なおかつ領域の城についても領主をも拘束する公共性の意識に支えられたものとしている（同「村の城」『シンポジウム小規模城館』第8回全国城郭研究者センター研究報告編　1992）。

7）物質文化の検討の深化から、生産活動の動機となった人々の精神の働きや、それを規制した社会制度を復原することはできるが、あくまでも間接的という限界がある（横山浩一「考古学とはどんな学問か」『日本考古学を学ぶ』1　有斐閣選書　1978）。

8）「村の城」論の方法的特質として、城郭遺構の解釈や分類については、極端に抑制する点がある。例えば、山下孝司氏は甲府盆地の中世城郭の検討のなかで、集落の背後にあり、これを仰視してできる立地と単純な構造から「村の城」と適合させて理解しているが（前掲山下4）論文）、こうした特徴は、どの中世山城でも基本的に合致する。また、村の城に関して確固たる資料がない場合、他地域の資料を積み重ねる作業の重要性を説いているが、結果的には無理に他地域の実態を甲斐地域の城郭遺構に適合させることにならないだろうか。

9）本来ならば、なぜ極端に結論を急ぎ、資料学的な問題が後付けになったか、の原因を追求する必要がある。筆者は、その遠因のひとつとして、城郭研究者が戦前の研究を「自己批判しなかった」（第4回全国城郭研究者セミナーにおける橋口定志氏の発言）ことにあり、研究自体が自己目的化に陥いり、中世史全体のなかで位置づけつつ、研究と目的の相互の問い直しが見られなかったためと考える。これに痺れをきらして80年代後半から、民衆と城の積極的な関係が城郭研究者外部（おもに文献史学）側から先鋭的に問題提起されてきたものと解釈している。

10）前川要「近世都市遺跡の展開」（『考古学ジャーナル』323　1990）

11）特に一連の橋口定志氏の成果がある（同「中世居館の再検討」『東京考古』5　1987、「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論』454　1988、「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』

330　1990、「中世居館研究の現状と問題点」石井進編『考古学と中世史研究』名著出版　1991）。

12）1993年以降、織豊期城郭研究会による瓦・石垣などをテーマとしたシンポジウムが展開されている（同会編『織豊城郭』1、2　1994、95）

13）学際的研究の成果として1988年の第5回東海埋蔵文化財研究会シンポジウム「清須－織豊期の城と都市－」がある（『清須－織豊期の城と都市－』研究報告編　1989）。都市清須の復元を共通の課題設定としたこと、不充分な都市遺跡としての認知の問題などが学際的意義の背景にあった。しかし、学際的研究の中で各分野が主体性を確立し得ているかという問題は、やはり残っている。

14）縄張り図と実測図と関係については、千田嘉博「中世城館縄張り調査の意義と方法」（『国立歴史民俗博物館研究報告』35　1991）

15）前川要氏は「縄張り研究が仮説を立て、考古学研究がそれを実証していく」過程の重要性を述べている（同『都市考古学の研究』柏書房　1991）。これに対して松岡進氏は制約された発掘調査の中では、縄張り研究は相対的に独自の分野を占めるとしている（同「書評　前川要氏著『都市考古学の研究』」『中世城郭研究』7　1992）。

16）例えば高田徹「田丸城採集の屋根瓦について」（『織豊城郭』1　1994）、高田・内堀信雄「美濃における十五・十六世紀代の守護所の変遷」（金子拓男・前川要編『守護所から戦国城下へ』名著出版　1994）。

17）千田嘉博・小島道裕・前川要『城館調査ハンドブック』（新人物往来社　1992）

18）千田嘉博「中世城館研究の構想」（石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社　1991）。また河西克造氏は軍事面・防御面を考古学的資料・踏査図で考察を深める「縄張り研究」と、おもに「縄張り図」の図化に終始する「縄張り図研究」を区別している（河西「大倉城跡の構造をめぐる従来の認識」『大蔵城趾』豊野町教育委員会　1995）

19）『大俣城跡現地説明会資料』（㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995）。また発掘調査については引原茂治・石井清司・大岩洋一各氏にご教示いただいた）

20）岡野允「丹後の山城」（『舞鶴地方史料集』14　1981）

21）現地調査は高橋成計、西村正芳両氏と行った。曲輪・堀・虎口など高橋氏とはほぼ同様に作図ができた。また、遺構状況は発掘調査のための木々伐採の終了時点であることを明記しておく。

22）図の等高線は、前掲⒅の現地説明会資料を活用した。

23）近畿地方の畝状空堀群の年代については村田修三「戦国期の城郭」（『国立歴史民俗博物館研究報告』8　1985）および『京都府遺跡調査報告書』14（㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990）の平山城跡の発掘成果が参考になる。

24）前掲(19)には、虎口部分や主郭を中心とした詳細な図がある。発掘調査による実側図作成は縄張り図と単純に比較できるものでなく、より追加し高度になることを前提している。

25）前出の「村の城」論の視角を意識した際、中世後期に村落自体の自衛（防衛）よりも、あえて生活空間から離れ山城を別個に築く意味を再検討する必要がある。橋口定志氏が中世前期の「堀ノ内」として、単に方形居館だけでなく、山野を含みこんだ溝・堀の囲繞する空間と捉える視点（同「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』330　1990）を評価するならば、たとえ山地の村であっても、生活空間としての村落を囲い込む可能性はあったわけである。

26）八巻孝夫「中世城館研究への提言」（『地方史研究』202　1986）

27）縄張り図作図をめぐる個人差の問題点については、前掲千田(18)論文参照。

28）1995年夏、長野県立歴史館にて行われた第12回全国城郭研究者セミナーにて、愛知中世城郭研究会の高田徹氏は、池田誠・藤井尚夫両氏の長篠合戦陣城遺構の研究を地籍図や聞き取りから「半ば仮説と事実を混同させたような発言・縄張り図上の表現は第三者に誤解を招く」として批判した（高田「東三河の中世城館」『第12回全国城郭研究者セミナー資料』1995）。これに対して、池田・藤井両氏は城郭破壊が進行するなかで、評価より先に遺構を書くことが、次の研究のステップになる旨を語った。遺構範囲を確認し、広めにとることは大事だが、考察・解釈を積極的に加えていくべきか、問題点として残る。今回のような、地元の愛知中世城郭研究会などと外来の研究者と齟齬をきたしていることをどう考えるか、さらに一定の評価を加えるイラストが城郭の復元整備に大きな影響力を持ち始めていること（齋藤慎一「城館調査と保存問題」『内乱史研究』15　1994）をどう捉えるか、保存と活用をめぐる課題になると思う。

29）松岡進「戦国期城館遺構の史料的利用をめぐって」（『中世城郭研究』2　1988）

30）柴田龍司「笹子城跡の概要」(財)千葉県文化財センター『研究連絡誌』37　1993）

31）『山田城跡発掘調査報告』（東員町教育委員会　1984）および、中井　均「中世城館跡調査の成果と課題」（『考古学ジャーナル』353　1992）。

32）井上哲朗「中世の城と館」（房総考古学ライブラリー8『歴史時代』2　(財)千葉県文化財センター　1995）

33）出宮徳尚「戦国城郭の構成試論」（『小室栄一教授古希記念論文集』五月書房　1983）

34）千田嘉博「織豊系城郭の構造」（『史林』70－2　1987）および、前掲千田(14)論文。

35）長谷川銀蔵・博美父子の研究による。

36）『倭城』1（倭城址研究会　1979）

37）千田嘉博「集大成としての江戸城」（『国立歴史民俗博物館研究報告』50　1993）

38）ほかに、織豊系城郭の技術的基盤となった戦国期畿内の動向の評価なども、寺内町プランと

の関連で課題を残している。

39）千田氏が意識的に排除した部分を、再評価して地域史に活用しようとする試みとして、拙稿「織豊系城郭の地域的展開」（村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社　1990）、木島孝之「九州における織豊系城郭」（『中世城郭研究』7　1992）がある。ただし、織豊系プランの範疇の遺構でしか評価できない難点を持ち、課題を残している。

40）萩原三雄「丸馬出の研究」（『甲府盆地－その歴史と地域性』名著出版　1985）

41）八巻孝夫「後北条領国の馬出」（『中世城郭研究』4　1990）

42）1987年、『図説中世城郭事典』刊行時点において、織豊系城郭の年代観についての評価は東日本と西日本の研究者間に差があった（村田修三「中世城郭の見方と縄張図」『読売新聞』夕刊1987.9.22）。現在もこうした年代観の違いが存在すると思われる。また、年代観の指標となるべき「馬出」（虎口空間）の概念も東西の城郭研究者間で微妙に差があり、議論の妨げになっている。一例として、八巻氏による千田氏の岩崎城評価に対する批判などがあげられる（八巻「馬出を考える」『中世城郭研究』3　1989）。

43）一部、村田修三氏や角田誠氏によって南北朝時代の山城遺構について考察されたが（村田「中世の城館」『講座日本技術の社会史』6　日本評論社　1984、同「戦国期の城郭」『国立歴史民俗博物館研究報告』8　1985、角田「南北朝時代の山城について」村田編『中世城郭研究論集』1990、以後は低調と言わざるを得ない。

44）この点については橋口定志氏の指摘がある（橋口「中世居館研究の現状と問題点」石井進編『考古学と中世史研究』名著出版　1991）。

45）こうしたなかで、田村昌宏氏は考古資料を使いながら、伊賀惣国一揆の城館プランの編年案を示している（田村「中世城館と惣国一揆」村田編『中世城郭研究論集』1990）。

46）『三重の中世城館』（三重県教育委員会　1977）

47）宮島敬一「戦国期在地法秩序の考察」（『史学雑誌』87－1　1978）

48）村田修三「大和の城跡と国人」（『歴史読本』22　1977）

49）村田修三「城跡調査と戦国史研究」（『日本史研究』211　1980）

50）なお、村田氏の研究史の流れでいえば、こうした大和の城郭調査が類型化に留まっていた反省から、資料学としての編年研究へ入っていく順序になっている。村田氏の研究業績については、前掲松岡29）論文参照。

51）多田暢久「城館分布と地域構造」（村田編『中世城郭研究論集』　1990）、「東山内の城館構成」『シンポジウム小規模城館』第8回全国城郭研究者センター研究報告編　1992）。

52）太田順三「荘園と『地域的一揆』体制」（『佐賀大学教養部研究紀要』12　1980）、安田次郎「大和国東山内一揆」（『遙かなる中世』5　1982　後に戦国大名論集『近畿大名の研究』〈吉川弘文館　1986〉に再録）

53）文禄元年（1592）9月20日付、木下吉隆宛　加藤清正書状『加藤清正文書集』（『熊本県史料』中世篇5　熊本県　1966）

54）在地に根ざした小規模城館でも、軍事的施設は積極的に構築されている。しかし、今まで突出した部分の評価が中心だったため、普遍的な基本プランとの関わりで論じられることがなかった。筆者は基本プランを中心に置き、軍事的部分を副次的要素として捉える方法で、丹波国夜久郷の単郭山城を考察し、単郭にとどまりつつも、16世紀中葉の畝状空堀群を構築していく動向を推定した（拙稿「畿内近国における『小規模城館』について」『第12回全国城郭研究者セミナー資料』1995）。今後は伊賀・甲賀だけでなく、全国的に普遍的に残る小規模城館の特質を比較検討する必要がある。

55）方法論や実証などの深化のため、城郭研究内部での議論がさかんに行われる必要がある。しかし、城郭研究者には、研究史のなかで自己の考察を位置づけたり、他者の仕事を批判的に継承する基本作業への関心が乏しい。たとえば、戦国大名武田氏に関する城郭遺構の研究は数多いが、最近の研究史をまとめた仕事は石川浩治「三河の武田氏系城郭について」（『愛城研報告』1　愛知中世城郭研究会　1994）のほかは見られない。研究史に制約されない点を留意しつつも、他分野へ問題点を発信・開示していくことも研究者の責務ではではないだろうか。

56）前掲橋口11）の各論文、山本雅靖「伊賀地域　中世後期における階層構成の一問題」（『信濃』38－8　1986）

57）八巻與志夫「水利慣行と館」（『日本歴史』398　1981）

58）飯村　均「山城と聖地のスケッチ」（『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』5　1994）、中澤克昭「中世城郭史試論」（『史学雑誌』102－11　1993）

59）中井　均「軍事施設としての中世城郭」（『第10回全国城郭研究者セミナー資料』1993）

60）村田・橋口論争の経過については、前掲市村4）論文に詳しい。

61）橋口定志「最近の中世城館の考古学的調査例から」（『貝塚』15　1975）、『中国縦貫自動車道に伴う発掘調査』1（岡山県教育委員会　1973）

62）中井　均「中世城館の発生と展開」（『物質文化』48　1987）

63）峰岸純夫「館跡のプランについて」（『石那田館跡』　栃木県教育委員会　1975）

64）『大内氏館跡』Ⅰ～Ⅸ（山口市教育委員会　1981～92）、古賀信幸「大内氏遺跡発　掘調査の現状と課題」（『季刊あるく中世』4　1992）、「守護大名大内（多々良）氏の居館跡と城下山口」（金子拓男・前川要編『守護所から戦国城下へ』名著出版　1994）。

65）古賀信幸「大内氏館跡の庭園遺構」（『山口県文化財』24　1993）、「山口県山口市大内氏館跡」（『日本考古学年報』45　1994）。

66）古賀信幸氏のご教示による。

67）高瀬哲郎「肥前名護屋城跡の陣跡の調査」（『日本歴史』453　1986）、「肥前名護屋城跡と陣跡の発掘調査」（『第3回全国城郭研究者セミナー資料』1986）、『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡－古田織部陣跡発掘調査概報－』6（佐賀県教育委員会　1991）、『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡―徳川家康陣跡―』（鎮西町教育委員会　1986）、角田誠「肥前名護屋城と周辺の陣跡」（『城』　139　関西城郭研究会　1992）

68）木戸雅寿「安土城跡発掘調査の成果と今後の課題」（『日本史研究』　369　1993）、小島道裕「織豊期の都市法と都市遺構」（『国立歴史民俗博物館研究報告』8　1985）

69）前掲高瀬67）論文、および現地説明板を参考にした。

70）高瀬哲郎氏のご教示による。

71）『津田宗及茶湯日記』天正6年（1578）10月15日条（『茶道古典全集』7）

72）村田修三「最近の城郭史研究の成果と課題」（『北陸歴史科学研究会会報』21　1986）

73）その意味で、城館遺構の周知の遺跡化として、中世城館悉皆調査の現状を確認するについてもふれる必要がある（現段階の問題点整理としては、関口和也「中世城館址悉皆調査報告書の成果と課題」『歴史評論』451　1987）。また、縄張り図の使用で、生まれる発掘調査への弊害についても取り上げるべきであったが、別な機会に論じたい。

74）城郭研究者は縄張り図によって遺構平面図のみをおもに資料化しているが、当然ながら、ケバ図では傾斜は資料化し得ない。断面図や略測による曲輪面積など、資料化する項目は多い。

75）筆者は考古学がまったく専門外であり、本稿で取り上げた課題が力量を越えているを自覚している。本稿で使用した考古学用語は、前掲横山7）論文、同「型式学」（岩波講座『日本考古学』1　1985）、田中　琢「型式学の問題」（『日本考古学を学ぶ』1　有斐閣選書　1978）などから学んだ。縄張り図を使用した考察がこれらの用語に、どの程度適合し得るか、をもう一度問い直す必要がある。

補註1　その後の調査で基底部が確認された（大岩洋一氏による）。

補註2　飛騨尾崎城（岐阜県丹生川村）では、15世紀代の瀬戸・常滑窯の陶器が多量に出土しているが、土塁盛土中からも確認されており、16世紀後半の改修が想定されている。（『尾崎城跡発掘調査報告書』岐阜県教育委員会・丹生川村教育委員会　1993）

［付記］

本稿作成にあたっては、引原茂治、石井清司、大岩洋一、高瀬哲郎、古賀信幸、乾　貴子、古閑正浩、木島孝之各氏から貴重な資料を提供していただいた。また、中井　均、山上雅弘、黒田慶一、多田暢久、高田　徹、堀口健弐、藤岡英礼、中西裕樹、門田卓哉はじめ城郭談話会諸兄及び、松岡進、関口和也各氏に貴重なご助言をいただいた。感謝申し上げたい。